オリンピアンの人間力（ちから）

「オリンピアンの人間力」では、まなざしの奥に潜在するオリンピアンの人間力に迫ります。このインタビューの本編は、OAJウェブページ（http://www.oaj.jp）でご覧いただけます。

（文＝元川悦子）

第17回
荒川静香
（フィギュアスケート／1998長野大会13位、2006トリノ大会金メダル）

荒川静香が「イナバウアー」に象徴される見事な演技で金メダルを獲得した2006年トリノオリンピックから4年。当時の熱狂と興奮は今も多くの人々の脳裏に焼きついている。

「どんな気持ちの時も一緒に支えてくれた周りの人たちがいたから、あそこまでいけたと思うんです。演技の最後のポーズを取った時、安心感と感謝の気持ちでいっぱいになりました。それが、私の中で一番残っているトリノの記憶ですね」と荒川は感動の瞬間を振り返る。

彼女にとって金メダルはあくまで「結果」。オリンピックの頂点にたどり着くまでの「過程」の方が、圧倒的に大きな意味を持つという。

荒川がフィギュアを始めたのは5歳の時。両親と遊びに行ったスケートリンクで「ひらひらした衣装」を見て憧れたのがきっかけだ。当時は水泳や体操などさまざまな習い事をしていたが、フィギュアだけには目の色を変えて取り組んだ。

「フィギュアにのめり込んだ理由は私にとって一番難しかったから。覚える技が多くて、ジャンプも1回転ができたら2回転、3回転と時間をかけて進んでいく。表現も際限がないですし、伸ばすべきものが限りなくある。それが今もまだ続いている要因なんだと思います」

小学3年で5種類の3回転ジャンプをマスターして「天才少女」と名を馳せ、中学時代には史上初の全日本ジュニア選手権3連覇を達成。東北高校1年の時には1998年長野五輪に出場するなど、10代前半の彼女は飛ぶ鳥を落とす勢いだった。

「小学校3～4年の時にオリンピックの開催地が長野に決まり、その大会に出ることが夢の一つになりました。自分が出場できるかもしれないと現実的に捉えたのは1年くらい前。でもランキングがつく大会に出たことがなかったので、戦えるかどうかは全く分からなかった。13位になって初めて『今の力がそのくらいなんだ』と知ったくらいです」

伊藤みどりらの後継者になるべき逸材が16歳で世界の大舞台を経験したのだから、世間は荒川の大きな飛躍を期待した。だが彼女自身はオリンピックに出たことで「燃え尽き症候群」のような状態に陥ってしまう。

「高1で自分自身をコントロールすることができず、本当にいっぱいいっぱいでした。『オリンピックは大変なものなんだ』と実感して、楽しくスケートを続けられる環境に行きたいと考えてしまったんです」

2002年ソルトレークオリンピックは、日本女子の代表枠が2に広がったにもかかわらず出場権を逃す。本人も「この頃、もう一度オリンピックに出たいと真剣に思ったことはなかった」と打ち明ける。

そんな彼女の大きな転機になったのが、2004年の世界選手権だ。早稲田大学4年の荒川が「アマチュア最後」と考えたこの大会で優勝したことで、思い描いていた人生のシナリオが劇的に変化する。

「満足いく結果で引退できると思っていたんですが、世界選手権で優勝すると自動的に次のオリンピックのメダル候補に挙げられてしまう。周りも『お疲れ様』みたいな雰囲気ではなくなりました。自分自身も1年くらいは迷ったままでしたね。でも『もう1回スケートと正面から向き合って辞めたい。満足感を得るために頑張ってみよう』と2005年の世界選手権後に思い直して、トリノを目指すことにしたんです」

2004年に採点方式の変更も、22歳の荒川には大きなハードルだった。何をしたら高得点が出るか分からない。オリンピックへの道は想像を絶するほど厳しいものだった。

「今でこそ誰もがルールに適応していますが、最初は頭を切り替えることさえ難しかった。どの技を組み合わせればベストなのかを探る日々でした。そしてトリノでは自分が狙った通りに最高レベルを取れた。ルールに打ち勝ったことが人に勝ったことよりも嬉しかったですね」

荒川がフィギュアを始めて20数年。日本選手のレベルは飛躍的に向上した。2010年バンクーバーオリンピックに挑む浅田真央、安藤美姫、鈴木明子はみなメダル獲得を有望視されている。自らコーチを選んだり、海外で練習するのも当たり前になるなど、選手を取り巻く環境は目を見張るほどよくなっている。

「今はスケート連盟がサポート体制を強化しています。多くの先輩方が敷いたレールがあってこそ今がある。そういう意味でも浅田選手や安藤選手、鈴木選手には頑張ってほしい。みんな高い実力を持っているので、最後に心から笑えるような演技ができれば、結果は自ずからついてくると思います」

実際に頂点に立った人の言葉はやはり格別な重みがある。バンクーバーの大舞台で後輩たちが完璧な演技を見せ、日本女子フィギュア界がさらなる発展を遂げることを、荒川自身も願ってやまない。

トリノでは演技の最後の瞬間まで辿り着いたことが一番の喜びだったという
(C)PHOTO KISHIMOTO

オリンピアン：あらかわ・しずか
1981年12月29日東京都生まれ。プリンスホテル所属。東北高1年で1998年長野五輪に出場し13位に入る。2004年世界選手権で優勝し、2006年トリノ五輪で金メダルを獲得した。現在はプロスケーターとして活躍する一方、解説者としてもフィギュアスケートの魅力を伝えている。

（文中敬称略）